伝統工芸の工房に関する研究―台東区を対象として―

建設工学専攻（修士課程）　　Me11044　酒井（さかい） 聡子（あきこ）
建築史研究　　指導教員　伊藤 洋子　教授

序章　研究背景・目的・方法

1.1　研究背景・目的

織物や木工品などの、職人が手作業で作る品を伝統工芸品と言う。その歴史は江戸時代から始まったとされ、人々の生活に欠かせない重要な産業を築き上げた。しかし高度経済成長とこれに伴う生活様式・雇用環境などの変化により伝統工芸の衰退が見え始めた。産業の衰退からその原因を突き止め国が打開策をだしたが一時的な効果しかない。そこで本研究では伝統工芸品が生み出される工房に着目し、それに伴う居住空間や生産空間の配置関係や移築・改築や住み替えに伴って起こる空間利用の変化にどのようなパターンが内在するかを明らかにし、それに基づく打開策の知見を得ること、また伝統工芸のこれからの在り方に一定の考察を加えることを目的としている。

1.2　研究方法

①伝統工芸品を扱っている工房へ行き、アンケート調査・ヒアリング調査を行い、調査シートを作成する。
②調査した工房を類型化し、現在の伝統工芸品の工房の状況を調べる。
③調査した施設を時代背景と照らし合わせるなどし、空間利用の変遷の意味を考察する。

第二章　研究対象と調査内容について

2.1　対象地区

今回の研究では東京都台東区に対象地区を定めた。台東区は江戸時代より商工業の中心地の一つとして人口と産業が高度に集積し、比較的小規模な手工業や製造業、並びにそれらの生産の流通を担う問屋・卸売業の集積地として発展してきた。現在、区内には約 25,000 の事業所があり、地域ごとに同業種の事業者が集まっていることが大きな特徴である。以上の様に台東区とは工芸品を扱う主要な産地・商業集積地域であるため、東京都内の代表例と位置付けるに値する地区であると考えた。

2.2　調査対象の工房

調査対象の施設は「東京の伝統工芸品　見学・体験工房案内」東京都産業労働局商工部経営支援課平成 23 年 3 月発行のもの、台東区 HP の案内、江戸の伝統工芸協同組合、また施設関係者からの紹介から 26 ヶ所を選別した。他者へのアピールが強く、伝統工芸を広めていこうという意識が高いと判断したためである。

表 1　調査対象

No.	住所	施設名称	取扱工芸品名
1	台東区元浅草	S工芸店	東京七宝
2	台東区元浅草	N版画匠	江戸木版画
3	台東区千束	T製廉所	江戸簾
4	台東区下谷	江戸指物K	江戸指物
5	台東区池之端	S和竿	江戸和竿
6	台東区駒形	O屋	江戸手描提灯
7	台東区浅草	H銅器店	東京銀器
8	台東区入谷	江戸漆器I	江戸漆器
9	台東区三筋	N貴金属	東京銀器
10	台東区蔵前	M工芸	江戸指物
11	台東区谷中	A製作所	江戸鼈甲
12	台東区浅草	H	江戸手描提灯
13	台東区根岸	指物H	江戸指物
14	台東区寿	H堂	硯石・書道具
15	台東区入谷	E製作所	東京仏壇
16	台東区元浅草	T商店	江戸簾
17	台東区竜泉	K桐たんす	東京桐箪笥
18	台東区蔵前	I象牙店	江戸象牙
19	台東区上野	H錦氣堂	江戸表具
20	台東区東上野	I表具店	江戸表具
21	台東区上野	J屋	黄楊櫛
22	台東区下谷	F堂	江戸表具
23	台東区谷中	Tべっ甲	江戸鼈甲
24	台東区元浅草	O紋室	江戸木彫刻
25	台東区谷中	Y堂	江戸表具
26	台東区谷中	A製作所	江戸鼈甲

第三章　調査内容

台東区内の工房 26 ヶ所に以下の項目に関しての記述式アンケート（表 2）と、工房や職人の住居の移築や増改築の変遷について書き取り調査（表 4）と簡易な実測調査（図 1）をした。調査実施期間は 2012 年 9 月～12 月である。

	アンケート質問内容
1	施設に対して気に入っている点
2	施設に対して改善したい点
3	施設での採光・照明環境について気に入っている点
4	施設での採光・照明環境について改善したい点
5	今後、施設や照明・採光環境に対して変更する予定はあるか
6	後継者を育てているかどうか
7	6の回答の理由
8	施設について現在の敷地を選んだ理由
9	工房内の体験・見学の有無
10	9の回答の理由
11	ホームページの有無
12	11の回答の理由
13	一日の（または月・年の）来客数
14	10年・20年前と比べた客数の増減
15	現在まで繁盛してきた理由
16	伝統工芸の今後の在り方について

表 2　アンケート内容

第四章　結果

4.1　平面形態

平面形態について職場である工房と住居の空間配置を明確化するために、以下のような定義を設けた。
①職住併設型：工房と住居が同一建物内にある
②職住独立型：工房と住居が同一敷地内にはあるがそれぞれ独立した建物内にある
③職住分散型：工房と住居が別の敷地にある
④区外立地型：工房と住居が台東区とその他の区にあるこの内訳は表 3 の通りである。

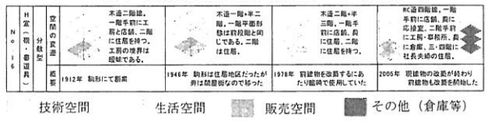
表 3　職住形態の分類

戸数	17	4	4	1
割合	66%	15%	15%	4%
名称	職住併設型	職住独立型	職住分散型	区外立地型
職住形態分類	住宅／工房（作業場）／同敷地内／台東区内	住宅／工房（作業場）／同敷地内／台東区内	住宅／敷地／工房（作業場）／台東区内	住宅／敷地／一方が台東区に立地／工房（作業場）／東京都内

4.2　工房の空間変遷とパターン

工房の空間を店舗空間・生産空間・住居空間の三種類に大別し、色分けを行った。定義は以下の通りである。
①技術（生産）空間：工芸品を作成する工房・作業場を指す。
②生活空間：職人の家族が生活する場を指す。家族以外の弟子が住込みで生活する場合もここに分類される。
③販売空間：販売・企画・流通・応接・物流のための空間を指す。完成した商品の販売または契約を結ぶなどの処理を行う。④その他：倉庫・事務所などの、販売空間に属するが表に出てこない空間を指す。

表 4　工房の変遷に関する調査シート（例：H 堂）



技術空間　　生活空間　　販売空間　　その他（倉庫等）

また、変遷する際にどのような空間利用の変化があったのかについて表 5 のような定義を設け集計した。

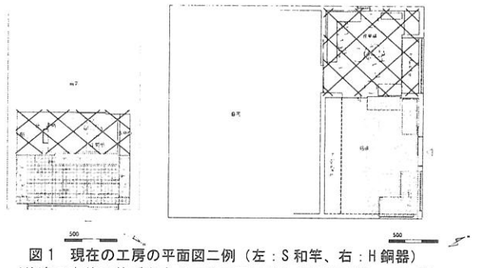


図 1　現在の工房の平面図二例（左：S 和竿、右：H 銅器）
（前述の定義に基づきすべての工房に対し色分けを行っている）

表 5　空間利用の変化に対する名称と内容

名称	内容
技術向上	工房の面積増加、機械類の導入などをした時期
販売促進	店舗・倉庫・事務所など販売・営業に繋がる変化を遂げた時期
生活向上	住居部分の増加などをした時期
移転	工房・住居の移転をした時期
人材育成	住込みの弟子をとりその為の空間を提供した時期
他収入	店舗・住居として他人に提供した時期

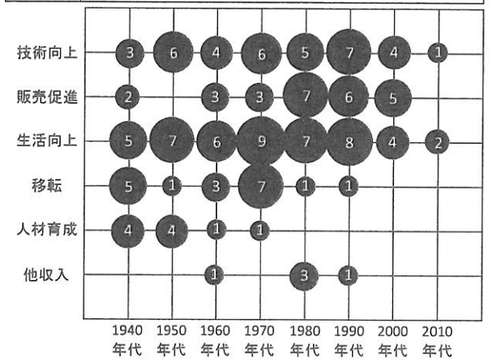


図 2　表 5 の定義に基づき集計した図
（なお 1940 年代以前のデータは工房の現主人の知識に及ばない部分であることが多いため省略する）

以上の定義に基づき空間への影響・相互関係を調べる。

第五章　考察

5.1　平面形態

平面形態について、かつては技術・住居・販売空間の境界が曖昧であった（同一空間内ですべてを補うことが多々あった）が現代に至るまでに明確に分けられるようになった（表 4）。図 2 の「生活向上」の値をみると各年代で頻繁にみられその都度住居と工房は分けられており、全ての工房で現れた変化であるといえる。それには、かつて家族全体が工芸の生産や業務に携わっていた形態から、主人とその跡継ぎ・弟子だけが生産に参加し他の家族の関わりが減ったことに関係しているとみられる。

跡継ぎ・弟子の減少も空間には影響している。跡継ぎだけではなく、住込みで技術を学ぶ弟子が 50 年前には一つの工房につき 4.5 人はいたため、そのための住まいが設けられることもあったし、工房にそのまま寝泊りすることもあった。しかし産業の衰退により仕事は減り、後継者を食べさせていく余裕がなくなった工房は多く、弟子をとらずに自分の代で工房を終わらせようと考える職人が数多くいる。図 5 の「人材育成」を見ても、途中までは家族ではない弟子のために住込みの空間をつくっていることが見て取れるにも関わらず、1970 年代後半からは一切その空間をつくらなくなるという傾向がみられた。弟子が所帯を持ち出ていくなど可能性は様々あるが、その後に弟子をとっても通わせることが多いようである。つまり「需要が減る→仕事がなくなる→収入が減る→弟子をとれなくなる→後継者がいなくなり、産業が発展しなくなる→経営規模が減り存在が薄れていく→需要がなくなる・・」といったループが起こる。

5.2　工房の土地移動

職人たちは職種によって一定の地域に固まる傾向がある。それは卸業者や同業者が近くにいた方が仕事を進めやすく騒音などへの理解も得られやすいことなどが原因である。客の偏りを考えると散らばったほうがいいと思われるのだが、かつての職人たちは前述のように近接した場所に工房を構えるのがあたりまえだった。しかし売り上げの大きかった昭和初期などはそれでよかったかもしれないが、需要が減った現代では近接していることが工房の縮小につながっていったとも考えられる。

5.3　店舗の出現

工芸品は基本的に工房で買えるものではなく、注文を受けてから作成する受注生産なため、店頭販売はせずに個人での取引か卸業者に卸すという形をとっていた。しかし、1960 年代に工房内に店頭販売形式のための店舗が発生する。この年代は高度経済成長の真只中で、戦後すぐに工芸品の需要が高まり資金が手に入ったことなどによる現象だと考えられる。また「販売促進」の値をみると 60 年代以降（主に 80,90 年代）も着々と店舗は現れるのだが、そこには高度経済成長で民衆の生活スタイルが変化したことから工芸品の需要が減り、卸業者が撤退を余儀なくされ、職人自ら販売していく形式をとるようになった時代が始まったという背景がある。

5.4　アンケート

アンケート内容からは後継者問題に関する事項が浮き彫りになった。現在後継者がいるかについて、調査工房 26 ヶ所の内 15 ヶ所が「いない」と回答した。今後存続出来ない工房が半数以上を占めた。また工房に対し建築的な面で工夫していることがあるかという問いには、指物や表具など比較的大きな品物を扱う工房では天井を高くするといった回答が得られたが他では特に気にしていないようである。照明に関しては工芸品が手元での作業が多いためか、ほぼ全ての工房でスタンドライトなどを活用している。採光に関しては材料の選別には必要であるが商品の保管の際には焼けて変色してしまうため避けるという回答が大半を占めた。

終

今回は現存する工房の空間利用の変遷とその社会的背景の関係について調査・研究を行った。工房とそれを内包する建物の変遷をみることができ、また職人の抱える問題点も浮き彫りになったと言える。一番大きな問題は後継者についてであるが、後継者のいない工房は自分の代で終わることがわかっているため「技術向上」「販売促進」の面で変化を見せにくい。職人たちには自分たちの代で終わりだからと現状維持をするのではなく、今後への発展としての工房の変化を提案していかなくてはならないのだと考える。

参考文献

1「東京の町を読む」陣内秀信著、相模書房、1981
2「全国伝統的工芸品総覧」伝統的工芸品産業振興協会編、2006
3「伝統工芸産地における事業所の空間利用の変遷と課題に関する研究：福井県越前市五箇の和紙産業を対象として(地域の再生,都市計画)」2007、時岡壮太、早稲田大学創造理工学術院修士論文